

ビッグバンから  
時空と四つの力まで

解	プ
	ラ
答	ト
	ン
	の

赤塚裕人

©Aquarius Navi Co., Ltd.



## はじめに

子供に夜空に浮かぶ月を見せて「あれは月っていうんだよ」と教えたら、子供は「お月さま、小さいね！」と言うでしょう。あなたも、まだ物心ついたばかりのころは、夜空の月を見て「小さい」と思っていたのではないのでしょうか。

ではなぜ、大人になった私たちは、夜空に浮かぶ「小指の先よりも小さな光」を見て、「自分よりもはるかに巨大な月という（衛）星がある」と思っているのでしょうか。そして、「私たちが住んでいる地球はそれよりも大きく、さらに、地球よりもはるかに大きな太陽があって、さらにさらに何光年も彼方には、太陽よりもさらに巨大で、明るく輝く（恒）星がある」と思っているのでしょうか。子供と、大人の私たち、どちらが正しいのでしょうか。

さて、その話に入る前に、一見関係ないように見えますが、実はつながっている非常に重要な話から始めます。

**あなたは、この世界にはルールがあると思いますか？**

ここでいう世界のルールとは、物理学の法則のような厳密なものではなく、「良いことをしたら、良いことが返ってくる。悪いことをしたら、悪いことが返ってくる」というレベルのものです。人によっては宇宙の真理だとか、神だとか表現するかもしれませんが。

今、あなたがテレビをつけたり、インターネットでニュースを検索したりすれば、即座に全世界のネガティブなニュースを見ることができるようでしょう。

自爆テロで何十人もの人が亡くなった。

大規模な災害で何千人もが命を落とし、家を破壊され路頭に迷っている人が何万人もいる。感染症のパンデミックによって世界中で多くの人が亡くなり、経済もボロボロになっている。

そのようなニュースを見たとき、どんな思考や感情がめぐるでしょうか。  
もし、あなたが、

「なんてかわいそうなんだろう。いきなりこんな不幸な目に遭うなんて」

「人類は昔から感染症と戦ってきた。感染症のパンデミックは、グローバル化が進んだ現代では必ず起こる。しょうがない」

と考えたり、感じたりしたら、

この世界は、何の罪もないのに突如として不幸になることがある世界である。

と認めていることになります。それとも、

この世界にはルールがあるから、不幸な目に遭った人にはその理由があった。

と考えるでしょうか。

では、望む結果を手に入れている人、成功者を見たときはどうでしょう。

成功につながる思考や行動を積み重ねていけば、成功する確率は高くなるが、最後は運。

と考えるでしょうか。それとも、

この世界にはルールがあるから、成功につながる思考や行動を積み重ねていけば、必ず成功できる。

と考えるでしょうか。

選択肢は2つです。

1. 世界にはルールはない。すべては確率（偶然）で決まる。

2. 世界にはルールがある。成功者には成功者になる理由があったし、被害者には被害者になる理由があった。

ひよっとすると第3の選択肢として、

世界にはルールがある。ただし、そこにも確率的な要素がある。

という選択肢も思い浮かぶかもしれませんが。つまり、世界のルールそれ自体に確率の要素があるということです。

普段から様々なことを学習している人であればあるほど、

「望む結果を確実に得る方法はないけど、確率を高めることはできます」

「成功者は成功の確率が高いことを次々とやってきたから、そのうち当たりを引いて成功者になったんですよ。成功はランダムにやってくるっていう話を知らないんですか!？」

「テロとか災害に遭いやすい場所に行ったり住んでいたりしたら、遭う確率は高くなるでしょうね」

などと言いたくなるでしょう。

絶対はないけど、確率を高めることはできる。

という考え方で成功を積み重ねている人は多くいるように見えます。

この場合は、言葉の最後に、「もちろん、最終的には運だけだ」と続くのか、それとも「最終的に、必ず成功できる」と続くのかで、結局どちらの立場かがわかります。あなたは、どちらの選択肢を選んだでしょうか。

ここで、重要なことがあります。世界のルールというくらいですから、例外は認められません。いずれの選択肢を選んだ場合でも、成功に対しても不幸に対しても、同じルールを適用する必要があります。

つまり、2番の選択肢を正確に言うならば、次のようになります。

2. 世界にはルールがある。成功者には成功者になる理由があったし、被害者には被害者になる理由があった。そこに例外はない。

ですから、次のように、場合によって立場を変えるのは認められません。

成功する確率が高い思考と行動を続けていけば、必ず成功できる（選択肢2の立場）。  
ただ、突如として不幸な出来事に遭うことはある（選択肢1の立場）。

というのは、なしです。

.....

どうでしょう。心がざわついてきたかもしれません。

さて、あなたはどちらを選ぶでしょうか。

1番の選択肢（最後は運）を選ぶなら話は簡単です。

成功者たちは確かに人並外れた努力をしたかもしれないけれど、最終的に成功できたのは運のおかげ。実際にそう言っている成功者も多いことが、それを裏付けている。

親が経営者であったり、身近にそういう人がいたりしたら、やっぱり成功しやすい。幼少期の環境の影響はかなり大きい。つまり、運。なぜなら親や幼少期の環境は選べないから。

どんなに気を付けていても、テロや災害に遭うことはある。遭った人はかわいそう。感染症が発生するのはしょうがないから、できる限り対策をすることが重要。

選択肢1を選べば、このように人生の最終的な決定権を手放すことになります。それは必ずしも悲劇というわけでもなく、「でも、確率を高めることはできる」と自分に言い聞かせることで、なんとかやっていけるかもしれません。

ただ、本当は2番を選びたいのではないのでしょうか。「成功にも不幸にも理由がある」という立場です。意識していなくても、次のように考える人は多いでしょう。

成功（望む結果）を得るために、日々思考と行動を続けていけば、どんどん成功に近づいていくことができると思っています。実際、完ぺきではないにせよ、そうしている。

この考えは2番の考えを信じているということです。

ところが、それに「世界のルールに例外はない」と付け加えたとたん、少し戸惑いを感じているかもしれません。

というのも、もし世界にはルールがあるという立場をとるなら、「テロや災害にいきなり巻き込まれた人には、その理由があった」「感染症のパンデミックが発生するのは、人類（？）に理由がある」と認めることになるからです。

こんなことを言うと「なんてことを言うんだ！ 被害者に同情したらいけないのか！」と怒りだす人もいます。

何の罪もない被害者に同情しない、それどころか「被害者には被害に遭った理由があるんですよ」などと言い出すものなら、その人は悪者とみなされるでしょう。

「お前が同じ目に遭ったときにもそんなことが言えるのか！ お前みたいなやつがいるから争いがなくなるらないんだ！ 同じ目に遭わせてやろうか！」と矛盾をはらんだ言葉で攻撃されるかもしれません。「被害に遭った数千人の前で同じことを言ってみろ！」などとも言われるでしょう。

貧しい国で生まれ、生きるための選択肢がごく限られた人達のことを指して、社会的立場のある人が「貧しい国に生まれたのには理由がある」などと言えば、社会的に終わる可能性が非常に高いでしょう。

それでもなお、「いや、世界にはルールがある」と確固たる意志で2番の立場を貫き通せるでしょうか。普通はできないでしょう。すると、自分が本当に思っていることを、他人の目を気にして隠してしまっている状態になります。

このように、私たちの頭の中には、「世界にはルールはない」という思いと、「いや、世界にはルールがある」という思いが同時に存在し、改めて言語化されると感情的な葛藤が生じます。「被害者には、被害に遭った理由があるのか」などと考えだすと、『被害者には被害に遭った理由がある』などと言ったら、他人にどう思われるか」を気にして感情的につらくなり、論理的に考えることができません。それ以上考えるのをやめてしまいます。

表面的には、「それは差別思想だ、支配者思想だ、選民思想だ」とか、「言っていることが過去の独裁者と同じだから悲劇につながる」などと、一見、人道的な理屈を並べ立てるかもしれませんが。

ただ、それは後付けの理由で言っているにすぎません。考えるのをやめたくなる本当の理由は、感情的に受け入れがたいからです。そのまま考え続けると、非常に困ったことに

なるからです。

「被害者はかわいそう」という気持ちの裏には、「もしかしたら自分も被害に遭うかもしれない」という恐れがあります。もし、そうなってしまったとき、「お前が被害に遭ったのは自分のせいだ」などと言われるのは、いくらなんでも耐え難いでしょう。

この世界では、どんなに善な行いをしていても、突如として不幸になる人がいる気がする。感染症や災害に遭うのは避けられない。

↓ まして自分はこれまでに人に言えないことを考えたり、悪い行動をしたりしてきた。

生まれながら今日まで、ずっといいことばかりしてきたわけではない（罪悪感）。

↓ いつ自分に突如として不幸な出来事が襲ってくるかわからない。

↓ 自分が同じ目に遭うかもしれないのに、被害者側に理由があつたなんて認められない。

「一番大切なのは信頼で結ばれた人間関係だ。人間関係があれば、何かあつたときに助けてもらえる」というような趣旨の発言を聞いたことがあるのではないだろうか。

ある程度成功した人でも、このようなことを言う人は多くいます。この発言の裏には「人

生には何があるかわからない。今はうまくいっていても、何か自分ではどうしようもないことが降りかかってきて転落するかもしれない」という思いがあります。

「自分も同じ目に遭ってしまいかもしれない」「自分も突如として不幸な出来事で転落するかもしれない」という思いがある限り、それ以上先に思考を進めることはできません。

ではやはり、「この世界にはルールはない」という選択肢を選ぶしかないのでしょうか。もう一方の、「この世界にはルールがある」ということを認めるためには、「突如として不幸な目に遭うのにも（突如に見えるだけで）理由がある」ということを受け入れるしかないのでしょうか。

実は、そうではありません。

安心してください。まったく新しい回答ができる理論があります。

私たちは、錯覚の中に生きています。

私たちは、世界の本当の姿をわかっていません。

脳に関する研究が進んだことで、私たちは目の前にあるものを見ていないように見えていないといったことなどが、脳の電気信号のレベルでわかるようになってきました。

宇宙は二次元平面に記述された情報にすぎず、脳がそれを解釈することで三次元として認識しているという理論も出てきています。

また、量子力学の分野では、客観的な実在は存在しないのかもしれないという実験結果が出てきています。

ですが、私たちが陥っている錯覚は、そんなレベルの話ではありません。

もっと根本的なものです。

私たちは生まれたときから根本的な錯覚の中で生きているため、世界にはルールがあるということを考えてときに行き詰ってしまいます。

私たちが陥ってしまっている錯覚から抜け出すための鍵は、「二元論」と「それに伴う

錯覚を見抜く理論」です。この両方を兼ね備えたものが、「TAWフラクタル現象学（略

称TAW）」です。  
※1（文末脚注参照）

TAW理論は、

あなたの意識がこの世界を創っている。

ということを前提に、

どのようにあなたの世界を創り出しているか。

に関する理論です。この理論を知ること、あなたは、

自分がとても安全な世界に生きている。

ということがわかります。

この本に書いてあることは、これまでの常識とは異なるかもしれませんが、だからこそ、最初は否定せずに、新しい理論の1つとして捉えてください。最初は否定せずに聞いてみるというのは、言われるまでもないことかもしれません。

ですが、私たちは、これまでの常識とあまりにも違うことを目にしたとき、「自分の世界が壊れるのではないか」という潜在的な恐怖を感じることはありません。すると、「これはスピリチュアルだ」「オカルトだ」「科学ではない」と、最初から頭ごなしに否定してしまふことがあります。

また、別のパターンとしては、既存の知識の枠に当てはめて、「なるほど、仏教の教えを別の視点から言っているのね」とか、「アリストテレス、カントが言っていることと同じじゃん」などと、わかった気になる場合もあります。それでは新しい理論を理解できません。

私自身、2016年にTAWフラクタル現象学をベースにした心理学のことを初めて聞いたときは、「思考は現実化する？ それならあらゆるアングルから、もう人生で1、000回は聞いたな。たぶん教えている人より僕の方が詳しい」と考えていました。今振り返ると笑えるほど、無知で傲慢だったわけです。それでも、当時は目についたものはすべて学ぶという方針であったため、学びはじめました。



影である」と同じものです。

世界はあなたの意識によって創造されています。しかし、私たちは自分自身の意識のうち、非常に浅い部分しか認識できていません。そのため、この世界が自分の意識から生じていることを忘れ、自分とは無関係の世界があるという錯覚に陥っています。その錯覚から抜け出すための最初のステップとして、「一元（世界はすべて自分の意識で創られている）」という考え方に立ち戻ります。そして、世界を創り出すシステムとしての意識についてみていきます。

また、一元という完全な状態から、「私」と「私以外」という二元が生じる仕組みや、意識には法則があるということについてもみていきます。意識に法則があることがわかれば、「意識が世界を創り出すなら、物理法則はいったいどうなるの？」といった戸惑いはなくなります。

次に、第二章では、プラトンの洞窟の投影のシステムをさらに詳しく説明し、世界の分類についてみていきます。私たちが「世界」と呼ぶものは、いくつかの階層（次元）に分かれています。あなた自身に非常に近い周囲の世界は、五感のすべてを使って感じられる非常に凝縮した世界です。そこには質量があり、状態は簡単には変化しません。そのため、

あなたの周囲で起きることは、非常に平凡なことばかりでしょう。あなたの日常で、テレビで見えるような大事件が起ることは、ほとんどないはず。一方、テレビや本の中では、大きな事件が起きたり、はるか彼方の宇宙のどこかではとてつもない規模の星の大爆発が起こったりしています。

実は、「あなたの日常」と「テレビやインターネットの中の世界」という2つの世界は、つながっていません。私たちは、これらの世界を区別せずに扱ってきたために、世界に生じた現象に感情を揺らしてしまっています。「遠い国のかわいそうな誰か」に不必要に心を揺らしています。自分の周囲のエネルギーが非常に凝縮した密度の濃い世界と、自分から遠いスカスカな世界をごちゃ混ぜにして扱ってしまっていることで、錯覚から抜け出すことが困難になっています。重要な鍵は、「現実」の定義であり、キーワードは「五感」です。プラトンの洞窟の投影システムに五感という分類法を加えて、世界を「階層」で分けると、なんと時空の謎が解けるのです。

意識には法則があること、そして、世界の分類についてわかったところで、いよいよ第三章では意識が世界を創り出す際の細かな仕組みについてみていきます。テレビには様々

な映像が映りますが、実際には赤青緑の3つの色の光の組み合わせで表現されているということはご存じでしょう。それがなぜ風景や人として認識されるのでしょうか？

これと同じように、私たちの世界には一見、様々な複雑な現象が生じているように見えますが、実際には私たちの意識が一連の仕組みによって映し出されているにすぎません。そこには、この世界が投影だからこそ生じるフラクタル構造と、そこに付け足される意味付けという認識の作用があります。第三章でその仕組みについてみていきます。

第三章までで、私たちの意識がどのように世界を創り出しているかがわかります。時間や空間といった認識がどのように生じるのか、広大な宇宙という認識はどのように生じるのか。自分から遠い世界ほど大きな出来事が起こるのはなぜなのか。すべて仕組みがあったとわかります。意識が投影した時空の中で、どのように現象を創り出しているのかを知ること、まったく新しい視野が開けてきます。

そして、第四章では第三章までの内容をもとにして、世界の正しい姿を改めて捉えなおします。プラトンが伝えようとした投影のシステムが、2500年の時を超えて、現代物理学の重要なテーマである「4つの力」の解明に大きなヒントを与えるでしょう。あなた

が最先端で物理学や生物学などの分野に関わっているのであれば、本書の知見を活用し、新しい世界を切り開いてください。

最初のほうの章を読んでいるうちは、意識が世界を創り出す際の仕組みや、世界の階層についてのパズルのピースがすべてそろっていないため、ところどころ疑問に感じる箇所があるかもしれません。ですが、安心してください。読み進めていくうちに、どんどんわかかっていき、最後にはピースがしっかりと合まるように構成してあります。ですから、途中で疑問に感じることもあっても、まずは一度、最後まで読み進んでください。

一度、意識が世界を創る仕組みを知ってしまうと、もう元には戻れません。「世界には運で成功する人がいる一方で、偶然不幸になる被害者がいる」という世界に戻ることはできません。

あなたの意識は、美しいルールに従って、あなたの世界を創っている。

ということがわかります。

それがわかったら、次はあなたの専門分野で、パラダイムシフトを起こしてほしいと考えています。宇宙論や量子論はもちろん、あらゆる分野の理論は、TAWの視点で捉えなおすことで、新しい視野が開けるでしょう。

あなたが、新しい世界を切り開き、人類のステージを高める存在となっていたら、この本の目的です。

赤塚裕人

# ビッグバンから時空と四つの力まで プラトンの解答 目次

はじめに…………… 3

■ ■ ■ 第一章 世界は意識の完全投影…………… 29

新型ウイルス感染症は存在するのか？…………… 30

「突如として不幸になることがある」という錯覚…………… 40

あなたは世界の創造者…………… 46

自分が周りに影響を与えている…………… 56

理性の脳を停止させる被害者意識…………… 61

意識の段階…………… 68

システムとしての意識―ゲノム解析の先へ…………… 72

時間と空間の外にあるシステム…………… 76

一元から世界が生じる仕組み…………… 87

あなたの誕生―バランスが崩れた世界…………… 95

意識の科学—AIは意志を持つのか

第一章のまとめ

第二章 世界（時空）の構造

意味付けとフィードバックで広がる世界

「空間がある」と認識する仕組み

思考が五感を生み出す

時間と空間の関係

世界の分類

不連続な世界

人類最大の錯覚から抜け出すカギ

直接五感の世界と重ね合わせの世界

シャボン玉の中心に立つあなた

夜空に浮かぶお月様はあなたより大きいのか？

現実と現実以外を区別する思考訓練

錯覚から抜け出す

117 100

119

120

124

131

140

148

157

164

171

176

179

183

187

直交する時間と空間……………

196

第二章のまとめ……………

199

■ ■ ■ 第三章 フラクタル投影の仕組み……………

201

自分の回りの出来事はなぜ平凡なのか？……………

202

拡大投影と補正……………

204

フラクタル投影という仕組み……………

215

エッセンスと意味付け……………

218

世界は図形でできている……………

222

総体とカケラ……………

234

AIに意識を投影する理由……………

242

ディープラーニングで見えてきた世界の構造……………

247

錯覚から力を取り戻す……………

266

第三章のまとめ……………

269

■ ■ ■ 第四章 世界の仕組みを解き明かす

重要事項のまとめ……………272

真空中に生じる何かの正体……………275

宇宙の創り方―錯覚で増え続けるエネルギー―……………279

ビッグバン理論の登場……………286

歴史の創り方……………290

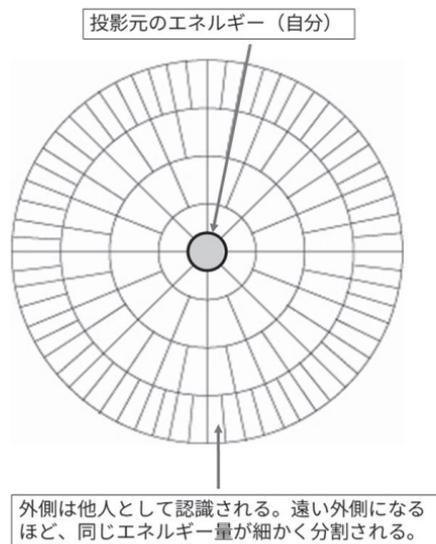
進化論と未来―人類は滅びるのか……………293

4つの力を統一するための再スタート地点……………299

ブラックホールとはなにか……………322

あとがき……………326

図10：外側の層ほど小さなカケラになる



## 意識の科学—AIは意志を持つのか

深層意識3にあるのは世界を創るシステムであり、数式です。深層意識3が創り出した世界の骨組みに対して、人間意識が意味付けしたことによって生じた世界を、あなたは表

層意識として体験しています。

その結果、システムとしての意識である深層意識3の仕組みは、「法則」として世界に投影されています。法則というの意味が広いですが、言い換えるなら、物理学や生物学などの（自然）科学の対象となる現象です。第四章でビッグバンと自然界の4つの力を取り上げますが、そういった科学の研究対象となる現象は、意識が世界を生じさせる仕組みに対して「ビッグバン」だとか「電磁波」、「強い力」といった意味付けを加えたものです。

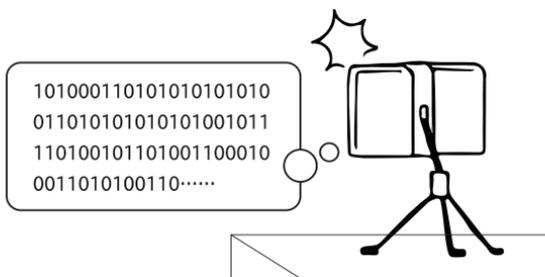
自然科学の分野の中で、「意識」そのものを科学的な研究対象とするのが脳神経科学です。とはいっても、意識は科学だけでなく、（近代的な意味での）哲学の領域でも長く論争のある研究対象であり、「科学的」に扱うのがなかなか難しいものです。そのため、脳神経科学では、感覚意識体験（クオリア）を主な研究対象の1つとしています。

クオリアとは、簡単に言ってしまうえば「見える」や「聞こえる」、「痛い」、「なんか嫌な感じがする」などの主観的な感覚のことです。そして、「なぜクオリアが生じるのか」ということは、「クオリア問題」と呼ばれます。ここで、なぜ、クオリア「問題」と呼ばれ

るのかについて少し説明が必要でしょう。

最近のスマートフォンは高性能なカメラを備えており、写真撮影から動画撮影まで高度にこなします。では、あなたがそんな最先端のスマートフォンを使って自分の動画を撮影したとしましょう。旅先で立ち寄った観光地で、あなたは三脚にスマートフォンをセットし、観光地についてレポートしている自分の様子を動画におさめます。さて、このとき、スマートフォンはあなたの姿を「見て」、あなたの声を「聞いて」いるでしょうか。

## スマホはあなたを見ているか？



```
101000110101010101010  
0110101010101010001011  
110100101101001100010  
0011010100110.....
```

残念ながら、スマートフォンはあなたの姿を見ていなければ、あなたの声を聞いてもいません。スマートフォンはカメラとマイクで捉えた光と音の波を、デジタルデータに変換し、単なるデータとして処理しています。スマートフォンやコンピュータの中では、データはすべて0と1の羅列で表現されます。つまり、あなたの姿もあなたの声も、スマートフォンの中では01001000のようなただの数字です。さらに言うなら、その0や1というのが物理的には何かといえば、コンピュータチップ内の非常に小さな各領域における電荷の有無です。

スマートフォンはあなたの姿を見て、あなたの声を聞いているわけではなく、単なる電荷の有無として処理します。そこにはクオリアは生じていません。あなたの表情が生き生きしているとか、なんか嫌な感じがする、などと感ずることもありません。あなたの着ている服の色が赤いとも思いません。単なる電荷の有無として処理されます。

そもそも、この世界に「赤色」なるものは、もともと存在しません。物理的に言えば、私たちが赤色と呼ぶものは、網膜に飛び込んできた波長が600nmから800nm程度の電磁波です。そのような電磁波に対して、眼球の光の受容体である錐体細胞などが反応

して電気信号を生じさせ、それが脳で処理されることによって、「赤色をしたトマトが見える」というクオリアが生じます。

ただ、脳は「ある入力」に対して「ある出力」をするニューロンという細胞の集まりだということを知ることがあるのではないのでしょうか。DNAの二重螺旋構造の発見によりノーベル化学賞を受賞したフランシス・クリックは、「You are nothing but a pack of neurons」…直訳するなら「あなたはニューロンのカタマリにすぎない」という発言を残したと言われています。

脳はニューロンの集まりであり、言ってしまうえば電気回路です。網膜に飛び込んできた電磁波によって生じた電気信号は、最終的に脳内で処理されますが、その一連の処理の様子は、外から観察する限り、ただの電気信号（と化学的な反応）の連鎖です。

ちなみに、AIの分野で今最も話題になっているトピックの1つはディープラーニングでしょう。そこで使われているディープニューラルネットワークやその原型であるニューラルネットワークは、そもそも人間の脳の仕組みを真似ようとして誕生したものです。

人工知能という言葉は1956年にダートマス大学で開催された、通称ダートマス会議で初めて使われたと言われています。この会議では当時の計算機関連の研究者が集まって、人工知能というものについてディスカッションを繰り広げました。

当時、脳科学の分野で脳のニューロンの働きの説明が進んでおり、脳はある入力に対してある出力をするニューロンという細胞の集まりだということがわかり始めていました。これはコンピュータを構成する要素と非常に似ているため、「脳もコンピュータじゃないか!」ということが言われ始めていました。つまり、脳の働きもコンピュータと同じような仕組みによって実現されているのであれば、コンピュータで脳の働きを再現できるじゃないかということを考えたわけです。そして人工知能という概念が提唱、検討されはじめました。

しかし、脳もコンピュータであるならば、なぜ、電気信号から「赤色をしたトマトが見える」というクオリアが生じるのでしょうか。これがクオリア問題です。なぜ、脳を持つ生物にはクオリアが生じるのか、なぜ電気信号が感覚を生み出すのか。

これに対して、科学は一切説明できません。なぜならクオリアは、「主観的」な感覚だ

からです。

そして、「他人が自分と同じ赤色を見ているとなぜわかるのか」という論争が続きます。ある人にクオリアが生じているかどうかは、その本人にしかわかりません。いくら本人が「私は今、赤色を見ています」と言ったところで、本当にその人が「赤色」を「見て」いるかはわかりません。実際には何のクオリアも生じていないかもしれないかもしれません。そのような、実際にはまったくクオリアが生じていない人間のことを、哲学では「哲学的ゾンビ」と呼びます。

近年では、他人だけでなく、急速に発展する人工知能（AI）が意識を持つことはあり得るのかということが話題になっています。AIの危険性は、AIが意識を持つ／持たないとは関係ないこともあります。映画ターミネーターのように、高度に発達したAIがやがて意識（意志）を持ち人類を滅ぼすのではないかという話は以前からあります。有名な科学者や経営者の中にも、AIの危険性について警鐘を鳴らす人は多くいます。

## AIが心を持つかと心配する人間

